

〈動向〉

ポーランドとアウシュヴィッツ ー中谷剛氏の講演会に参加してー

藤井 和夫

長い間、大学という教育現場で学生たちに接していると、若者の知性や感受性に変化を感じることがある。もちろん学生も千差万別で、モチベーションや性格、能力、嗜好、そして持ち合わせる知識もさまざまであるが、しかし個性の違いを超えて、その時代に共通した特徴がなんとなく見えてくる。今の学生に特に感じるのは、素直な感受性と繊細なコミュニケーション能力であろうか。教室で出会う彼らに呆れたり、がっかりさせられたりすることもままあるが、ときどき、その屈託のないのびのびした感受性に驚き感心させられることがある。そんな機会のひとつが、研修で10数名の学生とともにポーランドに行った際に行われるアウシュヴィッツ訪問である。

ポーランド研修はほぼ隔年に実施される。主な研修内容は、本学と交換留学を行っているウッジ大学の学生との研究交流とワルシャワ、ウッジ、クラクフなどの見学であるが、行程の中に必ずアウシュヴィッツ訪問を入れている。アウシュヴィッツは本来のポーランドの地名はオシフィエンチムで、中世から東西南北の商業路が交差する交通の要地であった。18世紀の末にポーランドがロシア・プロイセン・オーストリアの3国によって分割支配された時、この地はオーストリア領となって、その際にアウシュヴィッツというドイツ語の呼称で呼ばれたと記録にある。その地名が世界的に有名になったのは、言うまでもなく、第2次世界大戦でナチス・ドイツがポーランドに侵攻した後、

ここに絶滅強制収容所が設置されて、信じられないような規模の殺戮が行われたからである。

その跡地は、今日ポーランド国立博物館になっている。ここを学生と訪問するときは、かならず同博物館の日本人公式ガイド、中谷剛さんに案内をお願いしている。日本人見学者が増えて同氏のスケジュールが多忙になっても、無理を承知で可能な日程をお聞きし、見学のスケジュールを調整してガイドをお願いする。その理由は、数年前、初めて学生の研修グループを同氏に案内していた時に、学生たちの普段は見られない程の真剣な眼差しと同氏を取り囲む熱心な態度に驚かされたからである。中谷さんはアウシュヴィッツを案内し、展示物を説明しながら、そこで起きたことを伝えるとともに学生たちに今と未来を考えさせている。その語りは学生たちの感性にぴったり合っていたようで、探究心は弱くて浅く、感受性は繊細でも脆いと見えていた学生たちが、しっかりと集中して現在と未来を考え始めているように感じた。ぜひ日本で、もっと多くの若者にこの体験をしてもらいたい。そう考えるようになって、中谷さんに日本でのお話をお願いした。

中谷剛さんの日本での講演は、2017年12月10日に本学梅田キャンパス階下の会議室で、主体的な人権への取り組みを推進する関西学院大学人権教育研究室と、ポーランドの文化や社会を紹介し相互交流に取り組む民間の団体、日本ポーランド協会関西センターの共催によって実現した。定員

80 数名の会場は、壁際に立ち見の人がぎっしり並び、会場内の通路に座り込む人もいて一部の人は出入り口からはみ出るほどの盛況である。タイトルは中谷さんの希望で「ポーランドで学んだ 25 年」、アウシュヴィッツ案内の中身をご紹介するより、ポーランドに関心を持つ人たちの前で、ポーランドと自分の関わりやポーランドから自分が学んだこと、ポーランドのアウシュヴィッツで何をしようとしているのかについて話したいという中谷さんの思いを反映したものであった。

中谷さんはまず、ご自身のポーランドとの出会いについて語った。学生時代の一人旅で初めて遠い東側の国の一つであったポーランドを訪れ、自由へのあこがれを語る若者と話をし、その 2 年後の 1989 年にポーランドが体制転換を果たしてから、お祝いを伝える気持ちで再び訪れて、やっと自由を手にしたはずのポーランドの意外にも打ちひしがれた暗さに驚く。そして、なぜだろう、不思議な国だ、という思いは中谷さんの 1991 年に始まるポーランド在留につながった。

不思議な国ポーランドは、その後の中谷さんの生活の中にしばしば現れてくる。体制転換後の混乱した時期に、仕事もないままポーランド語を学んでいた中谷さんの熱心な申請に、困難と思われた永住許可がなぜか下りる。社会主義時代よりもさらに経済が悪化して失業率が 20% を超える中、豊かなバブルの日本からやってきた中谷さんが職業安定所に並んでいると、長蛇の列をなしていた求職中のポーランド人たちは嫌な顔をせず、逆に励ましてくれる。なんと在留許可の下りた中谷さんには、経済的に苦しいポーランド国民の税金による失業保険さえ支給される。

ポーランドに限らずヨーロッパでは、なんとなくユダヤ人嫌い、反ユダヤ主義という雰囲気が今でもある。後に中谷さんがガイドの資格を取ってアウシュヴィッツ博物館で働き始めると、この強制収容所に最初に連行されたのは確かにナチスに反抗するポーランド人政治犯だったのだが、最終的に収容され虐待された囚人の 90% はユダヤ

人であり、ポーランド人とユダヤ人の複雑な関係の中で、ポーランド人の館長やスタッフはそのユダヤ人のつらい経験を一生懸命に伝えようと努力している。さらに、第 2 次大戦中のポーランドの犠牲者数 600 万人のうち、半数はそこに住んでいたユダヤ人で残りの半数はポーランド人であり、誰が見てもポーランドは明らかな戦争の被害者なのに、後に公式機関を設けて戦争中のポーランド人によるユダヤ人虐殺事件を調査し、ポーランドは世界に向けて報告・謝罪している。自らを戦争の加害者の側面があると認めているのである。われわれのものさしではちょっと測れない、ポーランドは不思議な国だと、中谷さんは語った。

ポーランド人とユダヤ人の関係は、確かに複雑である。中世以来数百年にわたって微妙なバランスを保ちながらポーランドの社会を共に構成してきた両者は、ナチス・ドイツの侵略を大きなきっかけとしてそのバランスを失っていく。ユダヤ人の災禍に生命をかけて抵抗を試みた多数のポーランド人がいた一方で、戦争中の経済的略奪や一部での虐殺事件だけでなく、終戦直後にもいくつかの都市でポーランド人による反ユダヤ主義的暴動が起こっている。戦後のポーランドで生き残ったユダヤ人が社会生活と文化的伝統を再建することはむづかしくなっていたのである。

中谷さんはその著書の中で、アウシュヴィッツ博物館長を 35 年にわたって務めたカジミエシュ・スモレンさんのことを紹介している。スモレンさんは、戦争が始まってすぐに地下抵抗組織に加わり、ゲシュタポに捕まってアウシュヴィッツに送られたポーランド人で、収容された約 16 万人のうち半数しか助からなかったというその生存者の一人である。共に働きながら中谷さんはスモレンさんのことを、東西冷戦期の社会主義体制下で政治的圧力など博物館の運営に苦勞したことは想像に難くない、そして最大の犠牲者であるユダヤ人との関係で、ホロコーストと呼ばれる人類史上例を見ないジェノサイドの歴史の継承を、ポーランド人として引き受ける難しさがあつたであろう、と

書いている。

アウシュヴィッツに連行されたポーランド人は侵略国のナチス・ドイツと戦った英雄のはずなのに、ソ連に近いグループではなくロンドンの亡命政府側で戦ったリーダーたちは、戦後ソ連による政治的敵対者の粛清の中で危険分子扱いされたあげく、社会の影に落ちていった。つまり、ポーランド人も幾度となく選択を迫られてきた。ナチスに抵抗するか否か、迫害されているユダヤ人を助けるか否か、戦後のソビエトのシステムに同調するか否か、生死をかけた良心の選択である。ナチスと戦い、ユダヤ人を救い、強制収容所へ連行されながらも奇跡的に生還した人がいる。しかしこの英雄的な行為が戦後の社会主義体制下で危険人物とみなされると、戦後の社会の中で大した職にもつけなかった。自由を手にした後もわずかな年金で生活している英雄たち—中谷さんの眼に映るアウシュヴィッツのポーランド人たちはそういう人々なのである。

スモレンさんは見学しながら涙を流す人たちに、ここで起きたことに悲しみや痛みを感じることは必要だが、どうしてこんなことが起きてしまったのかを落ち着いて考えてほしいと語っていたそうである。そして、アウシュヴィッツを訪れてドイツ人としての責任を背負ってしまうドイツの若者に、君たちに戦争責任はない、でもそれを繰り返さない責任はあると優しくも厳しく語るのが口癖だったと中谷さんは書いている。将来、二度とこのような歴史が繰り返されないように、それが、ポーランドのアウシュヴィッツで、ユダヤ人が最大の被害者であったホロコーストの歴史を伝える彼らの思いであった。

講演の最後に中谷さんは、グローバル化の中での教育現場としてのアウシュヴィッツについても語っている。2004年に東欧諸国がEUに加盟したところから、ヨーロッパ中から学校単位で博物館を訪れる人が増え始め、入場者数は年間200万人を超えて年々新記録を更新している。その背景に、グローバル化の時代にうまく適応していくための

教育現場としてアウシュヴィッツの歴史をヨーロッパ全体で伝える努力が始まったことがある。つまり、現在の世界を見たらわかるように、ある意味で排他的な流れはグローバル化につきものなので、多様な民族が共存共榮していくときに起こりうるリスクを同時進行で考え始めるとホロコーストの問題を避けては通れないとの覚悟ができたのだらうというのである。ヨーロッパのしていることのすべてが正しいとは言わないが、ヨーロッパで起きたホロコーストの悲劇をヨーロッパがどのように、そしていかなる目的をもって次世代に伝達しているかについて知ることが大事だと、中谷さんは言う。

確かに、国境線をなくして個別の国民ではなくヨーロッパ人になろうとするとアイデンティティへの不安が生じ、不安ゆえに逆に民族性を強調する動きが生まれる。かつて、多様性を嫌い、純粋性を求めてドイツ人とは何かを追求し始めたナチス・ドイツは、結局ドイツ人の純潔性を証明するために、ドイツ人以外を作らねばならなかった。そしてユダヤ人をよそ者扱いする中で、差別と憎悪は膨れ上がっていった。さらに言えば、ヒトラーがもともと反ユダヤ主義者であったとしても、そのヒトラーは民主主義システムの中で台頭した。ホロコーストとは、自由で民主主義的な社会を基盤に政権を獲得したナチスが行った非道行為なのである。それゆえに、私たちは強制収容所の残忍性だけでなく、それを可能にした社会のシステムにも注目すべきだろう。アウシュヴィッツに次第に多くの人が訪問しているヨーロッパは、そのことを学び考えているのである。中谷さんは著書の中で、私たち日本の社会制度の弱点についても再考察されるべきであろう。そのためにヨーロッパの試みを参考にすることは有効だと思う、とも述べている。

中谷さんに講演を依頼した時、実は聞いてみたいことがあった。筆者は、社会主義時代から数えるとおそらく10回以上アウシュヴィッツを訪問しているが、そのたびに強い衝撃を受け、重いもの

を背負うような感覚に襲われる。中谷さんも著書の中で、初めてアウシュヴィッツを訪れた時は強制収容所の跡地で感じた死の気配が強烈で、果てしなく広大な土地を歩いていると、背中に無数の魂がかぶさってくるような錯覚さえ感じ、当時、そこで何が展示されていたのかもほとんど覚えていない、と書いているし、アウシュヴィッツが教えてくれることは、人間は信じられないくらい恐ろしい面を持っていることであり、私たちが常識として承知しているつもりの平衡感覚が、人間社会においていかに脆く崩れやすいものであるか警鐘を鳴らしてくれるとも書いている。ならば、毎日、時には2度も3時間の案内を続けている中谷さんは、その重さに耐えかね、あるいは疲れ果てるといことはないのだろうか。逃げ出したいのを辛抱して、何かに自分自身を縛り付けているのだろうか。

その答えを、今回直接尋ねることはできなかったが、講演を聴いて少し納得するものがあった。不思議の国ポーランドの話をされながら、18世紀末以来123年間自分の国を失った経験を持ち、短い独立の後ナチス・ドイツの支配を受け、それから解放されると今度は社会主義体制のもとに長らく抑圧されたこの国は、日本では考えられないような価値観を持っている、長い間自由を持てなかった人の方が、生まれながらに自由を持つ人よりもその価値をよく知っている。中谷さんは、ポーランドをそのように表現している。ポーランドを深く理解し、ポーランドから学び続けて得られるものを実感されているのだろう。お話を聞き終わってみれば、まさしくタイトルが腑に落ちる講演会であった。

文末ながら、久しぶりの帰省中の貴重なお時間を割いて講演を引き受けていただいた中谷さんと、当日大勢お越しくださり、熱心に講演をお聞きくださった参加者の皆さんに心から感謝申し上げる。

参考文献

中谷剛、『ホロコーストを次世代に伝える』（岩波ブックレット）、岩波書店、2007年

中谷剛、『アウシュヴィッツ博物館案内（新訂増補版）』、凱風社、2012年

ティル・パスティアン、石田他編訳、『アウシュヴィッツと＜アウシュヴィッツの嘘＞』（白水Uボックス）、白水社、2005年

ロバート・ジェラテリー、根岸訳、『ヒトラーを支持したドイツ国民』、みすず書房、2008年

ヤン・T・グロス、染谷訳、『アウシュヴィッツ後の反ユダヤ主義』、白水社、2008年

クロード・ダヴィド、長谷川訳、『ヒトラーとナチズム』（文庫クセジュ）、白水社、1971年